The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	附録　懐徳堂夜話
Author(s)	
Citation	懐徳. 1937, 15, p. 1-48
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88993
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懷德堂夜話

是の書は二卷一冊の寫本で、西村碩園博士の舊藏に係り、今我が懷德堂文庫に藏して居る。談者及び筆者は誰人であるか署してないが、本文を讀んで見ると、談者は中井竹山先生の第七子で、教授兼預人であつた中井碩果先生（名は曾縮、字は士反、天保十一年三月二十四日歿す、享年七十）であり、筆者は其の門人である野村廣善といふ人であることが判る。

當時の懷德堂は、毎月二四七九の日に夜講が開かれて居つたと見えて、日の下に講本が掲げられて居るが、其の講義が終つた後、碩果先生は門人と共に色々雜談をせられた。其の談話中に種々書留めて置くべき面白い有益な話があつたので、それを書記したものが是の書である。天保七年九月二十二日（碩果先生時に年六十六）から起つて、同十年十月二十二日（先生時に年六十九）までゞ終つて居る。これで終つて居るのは同先生は翌十一年三月に歿せられて居るから、或は病の爲に臥せられて、最早談話もなかつたものと察せられる。

是の書の內容は、目次に示すが如く學問上の事は多く載せられてないが、隨分珍らしい話が澤山ある。若しこれにヒントを得て研究すれば、面白いものが得られるであらうと思はれる。

今回本誌の附錄として、之を記載するに當り、校者は其の內容を明かにする爲に、番號を附したる目次を作り、本文欄外にも亦これを標記して、檢索の便に供した。また原本は、假名文字が片假名及び變體假名を用ひられて居たが、便宜上これを平假名及び通行の假名に改め、尙

明かに誤寫と認めらるべき二三の文字を訂正して置いた。其の他は總て原本のまゝである。但し字旁に括弧を施した處は、校者の加へたものである。讀者乞ふ諒せよ。

昭和十二年九月十日

校者識す

懷德堂夜話目次

一、河豚の中毒に就て
二、例年雨降らぬ日
三、米の蟲ずるは太平の象
四、江戸錦繪
五、和蘭の時計
六、札と筆の字
七、鵝字に就て
八、盜賊庄九郎の話
九、堀田相模守の話
一〇、米價騰貴と乞食
一一、長柄橋の木名
一二、女囚の今昔
一三、江戸の甘酒
一四、根津四郎右衞門と虎屋
一五、根津と澤村宗十郎
一六、虎屋の饅頭と代官
一七、小吏と節用集
一八、カマスの漢字
一九、ホウヅといふ魚
二〇、スッポの間に合はぬといふ言葉
二一、度し難き乞食
二二、遊治郎は追剝
二三、會津に寺なき理由
二四、長柄橋杭の古木
二五、女盜の話
二六、富士山に清盛を祀る

二七、文鳥は害鳥
二八、蒟子鳥と燕取
二九、麻田剛立と河童
三〇、肥後に他國人多き理由
三一、周防侯の驕奢
三二、四方竹の花入
三三、肥後侯米を贈る
三四、藤森の初午行事
三五、稲荷山柚を禁ず
三六、覆射の話
三七、藪孤山の質素
三八、櫻宮の幽靈談
三九、鯛鱧類少なき江戸
四〇、白魚の價
四一、蜆と出羽
四二、大鹽父子の死
四三、古林正見の漫談
四四、水戸黄門と拾芥抄
四五、水戸黄門の禮儀類典
四六、大鹽中齋と三幅對
四七、貝原益軒と軍書讀
四八、貝原益軒と藤井懶齋の子孫
四九、虎と猫
五〇、吳服橋に於て
五一、高麗橋櫓屋敷に就て
五二、和漢對話の優劣
五三、三浦安貞に就て
五四、奥田元繼と鮒伊の鰻
五五、米五升に五斗の返禮
五六、天王寺屋の古刀

五七、面白き乞食
五八、男女席を分つ屏風
五九、懷德堂書生の風儀
六〇、日本は米の國
六一、水田と高見
六二、小人島と夜人國
六三、助字に就て
六四、大鹽の亂阪本鉉卿に贈る詩
六五、疫病に芭蕉の根
六六、茄子の大樹と大牡丹大絲瓜
六七、妒字と妬字との別
六八、笠置の石棺
六九、旅行と健脚の人
七〇、灸嫌ひの竹山兄弟と小石元俊
七一、德川家慶の仁慈二條
七二、翫の字と玩の字
七三、曾我蛇足の雁畫
七四、漢土を唐山と書くこと
七五　和と倭の字に就て
七六、跡部奉行の加增に就て
七七、古書の引用に就て
七八、懷德堂講席の天井
七九　台德院の讀方
八〇、江戸の外科名醫
八一、獄門庄兵衞と紙治
八二、書家の癖
八三、開元天寶遺事に就て
八四、鶯の語源
八五、獅子と香爐
八六、大章魚の話

八七、人魚の話
八八、交厚き兩奉行
八九、橋普請の制
九〇、書林藤屋の話二條
九一、懷德堂の書生
九二、駒鳥の語源
九三、京儒者の弊
九四、ミサゴズシの味
九五、唐詩選の誤字
九六、山師の巧計
九七、應擧藍江の畫
九八、講堂の掛軸
九九、中井家藏の奇石
一〇〇、豕の話
一〇一、痢病の妙藥
一〇二、河豚の效能二條
一〇三、周到なる公儀
一〇四、一向宗の淸僧
一〇五、地獄極樂の話
一〇六、前川虛舟の拓本軸
一〇七、古人は質樸
一〇八、古法眼と信長
一〇九　羽織の話
一一〇、岡白駒と那波師曾
一一一、痲疾の妙藥
一一二、文晁の山水と萩燒花入
一一三、碩果の女再嫁
一一四、夜尿の妙藥
一一五、虎猫の肉
一一六、左傳摘要

一一七、五井持軒の逸話
一一八、行幸に象を用ふ
一一九、朝鮮人は臆病
一二〇、稲荷と藤の森
一二一、子路の像と禹王の像
一二二、石川五右衛門の話
一二三、日本左衞門の話三條
一二四、大與の僕仇を討損ず
一二五、丑の時參の話
一二六、秀吉の曾呂利畫賛
一二七、鱶の鮃
一二八、人魚の話
一二九、龍と龜
一三〇、墓の話

懷德堂夜話（卷之一）

天保七丙申九月廿二日　論語

先生の御談に、此節のことにや、北の新地の遊所へ毎日來る乞食あり、或日客へ出した殘りの河豚をやりしに、大いに悅びて歸りしに、五六日不來、其後又來りしかば、頃日は何ゆへ來らざると問ひしに、乞食云、先日の河豚にあてられ、既に死せしゆへ、梅田にてこもをきせ捨て是あり候處、五六日經て毒消し蘇生致し候ゆへ、參りし由申せしと也、又仰に、是も東國邊の者なりしか、癲病をわづらひ、河豚をくて死なんと思ひて、河豚をくひし處、毒に當られ惡血を吐死す、其邊の醫是をみて、いまだ少し臍の下溫なり、此儘捨置べしと云しが、はたして日をへて蘇生す、是を以てみれば、河豚の毒にあてられしは其儘打捨置べし、しからば毒消醒し蘇生す、しかしくはぬにますことはあらじと。

（一）河豚の中毒に就て

九月廿七日と十月の朔日とは例年より雨ふりしことなきよし奇なり、私案に、九月廿七日の事は始て聞り、十月朔日の事は（中井竹山）亡父にも毎度聞しが、一昨年雨少しふりしなり、されども吾父は一生十月朔日に雨ふりしことは御存なくして御死去なり、其翌年の十月朔日に雨のふりしことも亦奇なり。

（二）例年雨降らぬ日

廿四日　左傳

此節米高價の御話の序に仰られけるは、享保年間米穀下直にて、江戸品川などへ捨しと也、其砌御

（三）米の蟲ずるは太平の

象

藏米澤山蟲ずりけるゆへ、　台德院樣へ御賣拂のことを御窺申せし時、仰に、米の蟲ずる程太平なることはなしと、大に悅ばせ給しと也。

廿九日　左傳

御雜談のみ、

十月四日　左傳

(四)江戸錦繪

江戸錦繪は京都より下畫を書遣すと也。

(五)和蘭の時計

阿蘭陀には今時計をする家なし、彼此は何によらず物をはじめて工夫せし家もし斷ること有とも、他の家にて其を造ることならぬ也、時計も今其工夫せし家斷しによつて、新に工夫することは出來ぬと仰らる。

廿四日　左傳

(六)札と筆の字

ふだと云ふ字は、手へんにて候や木へんにて候やと窺しに、先生仰に、ふだは木へんなり、手へんはつかじにと云字なり、是に付ても手へんを木へん、竹冠をそうかうなどには多く書たり、筆と云字は竹冠がよけれど、多く法帖などにも艸かうにせり、唯拙きは竹といふ字を人扁にかくのは、片腹いたきことなり。

(七)鵝字に就て

又仰に、一字にて扁を左右上下に書ても通じる字一字あり、知やと仰に、余島と云字にて候やと申

せしに、いや〳〵鵝の字なり、上下左右ともに通ず、島は只三方なりと仰らる。

(八)盗賊庄九郎の話

又仰に、庄九郎といふ奴は盗賊なれども、をかしき奴なり、或時加島屋へ這入り、四千金を奪ひ去、其翌日加島屋の手代此事を訴ふに、何程の數なるやと御尋に、二千兩にて候や三千兩にて候や、しかと存ぜぬ由申上る、與力衆も、我を折られしとなり、此庄九郎、或時伊勢屋藤四郎方へ盗人に這入りし處、金數は左のみ仰山ならねど、一分に分位の小玉一升取しなり、庄九郎も此小玉を深く愛翫し、常の金數金を奪ひしよりは大切にして、召捕るゝ節まで遣はざりしとなり、庄九郎公儀にて云しことにや、火の廻り番の有程盗賊の仕よきことはなし、火の廻りの鳴子をぐわら〳〵鳴す間は、藏の棟へ上り居て、鳴子の音止て後盗賊をなすに、更に勞することなしと。

霜月二日　孟子

去月十七日より開講、今夜より本文の始りなり、今夜別に御雑話なし。

四日　左傳

(九)堀田相模守の話

當時の堀田侯相模守は、内の御勝手を直されたる手柄な御人なり。或時江戸より國家老を急に召呼して仰られるは、そちと舟遊して内々話たき事ありとのことゆへ、家老何事やらんと御請申上、扨舟遊の折仰られけるは、我下屋敷に豆畑あり、其豆を鴉が喰ふ、これを喰はぬ仕様なしゆへに、汝を招きそちの異見を聞んと思ふて、國元よりわざ〳〵呼よせしと仰らる、家老餘りのことに呆れて詞なし、

此噂專ら江戸の御城内へ流布しけるゆへ、餘多の人々、扨々堀田侯は馬鹿ものなり、あのやうな人に御役はさせられぬと有て、とんと御役を仰付らるゝ沙汰なし、依之無役也、此間に内の御勝手を直されるよし、かしこき仕方なりと先生仰らる。

七　日　孟子

御雜話のみ。

九　日　左傳

諸侯家の經濟の御話のみ。

十九日　左傳

米穀高價にて、長町にて乞食毎日三人ならしに死すとのこと也と仰らる。

（一〇）米價騰貴と乞食

又先生仰に、やぎといふ木を御存なるかと仰に、余が兄（中井蕉園）不知よし申されしに、先生われもしらねど、此頃長柄の橋の木ぎれをもらひし其木をやぎと云よし也、大木と思はる。

（一一）長柄橋の木名

廿四日　左傳

御雜話のみ。

廿九日　左傳

先生の御話に、今と昔とは事大に違ふ也、既に加島屋九兵衞の丁稚を殺せし時、九兵衞の女房も入

（一二）女囚の今昔

牢せしに、其時分は女の入牢と云こと至て稀にして、兩三人よりはなし、其故に牢へ伽にやとはれ行を商賣とする女ありし、今は女の入牢至て多くなりて、數百人に滿つ、夫ゆへ右の伽に行女もひまなこと也と仰らる。

（一三）江戸の甘酒

又仰に、江戸にて甘酒を賣店は、至て華麗なり、さて甘酒を賣にも、曲物へ入て賣ること也、土地の風俗をかしきこと也。

（一四）根津四郎右衛門と虎屋

又仰に、前方虎屋へ饅頭を調へんとて、堂島の俠客子ッ四郎右衛門と云る者、切手をもつて行しに、正銀を出す客へは菓子を早くやり、切手の方は久しく待ち置てやりしゆへ、四郎右衛門虎屋の手代を呼申けるは、其樣に切手を亀末にしては不繁昌の基也、以後は切手の方へは早速菓子を遣はし、正銀を出せし方へは跡よりやるべしといひしかば、虎屋手代屈伏して、急々に切手の方を先へやりしと也、夫より虎屋切手の方を先にすること也と仰せらる。

（一五）根津と澤村宗十郎

又仰に、かの四郎右衛門は道島の俠客にて、或年江戸表より澤村宗十郎來りし節、大阪の人々宗十郎に云けるは、道島の四郎右衛門を賴まねば評判の受あしゝ、貴公東土風にてつんとせられては爲にならずと云ふ、宗十郎諾し、四郎右衛門方へ至りけるに、宅せまく亀也、四郎右衛門は巨燵へあたりながら、女房に命じて湯婆を持し、酒を買にやり、いときたなき盃にて宗十郎と盃事をする、其應接至つて寛大至極なり、宗十郎無念に思ひけれども仕方なく、歸るときも來るときも門口より頓首再拜

をなしけるとなり、其翌日道島より米數百俵を積ければ、宗十郎始て四郎右衞門の勇氣をかんじけるとなり、此四郎右衞門芝居へ棧敷にて行し節は、方々よりの音物山の如く贈りて、挨拶丁寧にして賓客を敬ふが如し、或時場所にて喧嘩有りしかば、四郎右衞門高聲に棧敷の上より、爰に四郎右衞門が居るぞや、夫にても喧嘩をするかと云しかば、場の喧嘩鎭りしとなり。

（一六）虎屋の饅頭と代官

又仰に、玉造の代官、初午の日諸人に饅頭をやる、その數五六千に及ぶゆへ、虎屋へ前日より誂へに行き、手代を呼、至極仰山にいひけるゆへ、手代饅頭は如何程入候と問、答云、五六千に及と云ふ、手代笑ふて、五六千ならば暫時の内に指上候はんといふに、代官大に呆れられけると也。

（一七）小吏と節用集

又仰に、或時西御番所の小吏、追手筋の書林の門を通りて、書林の亭主を呼、汝只今御用の筋ある間、急に牢屋敷へ來れよ、亭主大に驚き、いかなることにやとあやぶみながら、牢屋敷へ到りければ、外の用にてはなし、汝の内に節用集は無か、牛の死を、たをるゝといふ、其たをるゝといふ字が見たしといはれしに、始て呆れ、早々節用集を吟味して持行しと也。

（一八）カマスの漢字

先日の御話に、錢かますのかますといふ字を仙臺錢御停止の時の御觸書にありしが、わすれしと仰らる、其後予奈良屋米兵衞といえる字義を好める人に尋しに、奈良屋の云、蒲笥の二字をかますとよむといはれしゆへ、先生に此事を申せしに、いや一字也、其字にてはなしと仰せ、其后予難字訓蒙圖彙といへる書をみしに、屌の字にかますのかな付てありしゆへ、先生に又申上しに、いかさま其字也

と仰らる。

十二月十四日　左傳

備前の沖にホウヅといふ魚あり、けしからぬ長き魚也、物の諺にホウヅがないと云ふことは、是より出しと也。

（一九）ホウヅといふ魚

又仰に、世の諺に、スツポの間にもあはぬと云ふことあり、これは京橋の川魚市に、鼈が仕舞に殘るもの也、その鼈を買に行しに、その鼈もなしと云ふことなり、これよりものゝ間にあはぬをスツポの間にもあはぬと云ふ也。

（二〇）スツポの間に合はぬといふ言葉

又御話に、頃日のことなりしが、砂場邊の饅頭屋へ乞食四五人這入り、饅頭を多く喰ひ價を拂はず、尚喰せと云ふに亭主怒り、とやかく爭ふて居る處へ、去所の隱居通り合せ、此事を聞て不便に思ひ、價を拂はんと云ふ、亭主氣の毒に思ひ、左樣仰らるゝことならば半價にても濟し申さんと云を、隱居不殘拂立出ぬ、已前の乞食隱居の跡を追行て、隱居を丸裸にせしと也。余が外にて聞しは、御靈前の餅屋のよし、いづれが是なるや。

（二一）庚し難き乞食

十九日　左傳

頃日のことにや、或客廓へ行、歸りに牽頭送り來りしに、其客は追剝にて、牽頭の衣服を剝なを褌を奪はんと云に、驚きて詫れども不聞、已の褌をあたへ牽頭の縮緬の褌を奪、牽頭逃行後よりかの追

（二二）遊冶郎は追剝

剝客呼こと頻也、牽頭やう〳〵虎口をのがれ歸りしに、腰のあたりの痛に褌を取て見しに、金五兩ありしと也、扨こそ已前叫しは、その金を奪はれしゆへとしらる、此話は古き話のよし、頃日世上の物騒に附て云出せるなるべし。

(二三)會津に寺なき理由

又仰に、會津の領内に寺なし、正之公の時公儀へ仰られしは、妻子もなき坊主に事を託せんは氣づかはし、村の名主年寄にて事を濟さんと仰られしかば、御許容なりて、夫ゆへ今に寺なし。

(二四)長柄橋杭の古木

先日の御話ありし長柄の橋杭の古木を御見せなされ、京都の物産家山本氏へかんていのことを御賴し、予其木をみしに、至て新しき木也。先生仰に、水中へ沈し木は水にさらされ、却て新しきもの也と仰らる、其後大工久右衞門といへる工匠に此木をみせしに、杉也といふ、木も至つて古きよし、先日先生のやぎと仰られしは、すぎとやぎの字の磨滅にやと思はる。

(二五)女盗の話

又仰に、頃日女の追剝あり、やねをはしること飛鳥の如し、或もの見付て大勢にて圍しかど、月影に姿のみ見へて捕得ざりしと也。

(二六)富士山に清盛を祀る

頃日法華宗の工夫にて、清盛の像を富士山へ祭り、女人も參詣するやうになるとの事也。

天保(八年)丁酉

正月廿七日　孟子

(二七)文鳥は害鳥

先生御話に、文鳥は稻の穗を喰切鳥ゆへ、阿蘭陀などにては飼ふことは勿論せぬ也、日本の愛翫するをみて甚笑ふと也、實に彼鳥次第にふえて群飛せば、米穀の害をなさん、されば文鳥飼ふことは禁制ありたき事也。

(二八)薦子鳥と燕取

此月中旬頃異鳥群飛す、(中井蕉園)家兄此鳥を京都の物産家へ御見せありしに、薦子鳥(アッシトリ)と云て、日本紀などにも見えたり、漢名花鷄と云ふもの也、此鳥を先生へ御覽に入しに、しばらくかせと仰あり、其御話の序に、此間鴻池善五郎方へ放し鳥屋來りしに、雀のかはりに右の薦子鳥を持參れり、頃日は雀より此鳥の方が澤山ありて下直なるよし。

小倉城下に代々燕をよく取者ありて、甚功者のよし。

(二九)麻田剛立と河童

浪華の天文家土屋の師匠は淺田(麻田剛立カ)こうりうとて、甚天學にくはしくして、若き間は一時より寐ず、今老年ゆへ二時を寐るとのこと也、此淺田氏甚河童を取ることに妙を得たり、其河童を捕法は、河童磯邊にて相撲など取ことあり、其時空砲を磯へ捨置、河童疑て敢て近よらず、されども後には次第に疑心散じ戯れ遊ぶ、其時澁帷子を着し、實の鐵砲にて討ば、河童其儘水中へ入を、引續て飛入て擒也、河童は澁を恐るゝものゆへ、水中へ飛入ても、外の河童近よらざる也。

二月二日　孟子

(三〇)肥後に他國人多き

先生御話に、肥後屋敷へ講釋に行し處、役人聞りとて仰らるゝは、肥後の國へ他鄕の民數多入込居

理由

ゆへ、此度夫を吟味致せしに、一萬五千人に餘れり、肥後はよく米の出來しゆへ也と。

四　日　左傳

(三一)周防侯の驕奢

周防侯の竹島の事露顯せしは、竹島の材木を以て御役屋敷を建られしに、脇阪侯御移住なりて後、建ものゝ木の目なれぬ事から段々糺されし處、竹島の良材にて作りし事露顯せし也、周防侯は愚也と仰らる。

(三二)四方竹の花入

薩州侯の御着の節、近權より四方竹の花入を獻上す、侯御感心ありしと也、彼國にも四方竹はあれども、見事なは稀也、先生仰に、杖にして至極よし、則我庭にもありと。

九　日　左傳

(三三)肥後侯米を贈る

頃日仙臺侯より御賴によつて、肥後侯より一萬石を贈らる、肥後豐作ゆへ也。

(三四)藤森の初午行事

例年初午の日、藤森より京都の稲荷へ地をかへせ〳〵と云て行、これは稲荷の地面は、藤の森の地面ゆへ也、その時稲荷山より答に、るす〳〵と云てすまず也。

(三五)稲荷山柚を禁ず

稲荷山へは柚を禁ず、もし柚誤て山へおちぬれば、其所松茸生ずることなし。

(三六)覆射の話

世に的ものゝ占といふ事あり、則文字は覆射と書、すべて的ものはさす人に術ありて、大概そこらあたりの事をいろ〳〵いふと、的ものを望し人の顏色自然と變ずる、そこを見て取てさすこと也、是を破る法あり、もし的ものをよくする人あらば、中へ入るゝものを脇の人に品ものを入さし、其の人

を脇の方へ去しめる時は、さすことあたはず、これ己が中のものをしらぬ故、其氣色面へ出ざるゆへ也。

余按ずるに、駿臺雜話の飛驒山天狗の話、この話と事異にして意は同じ。

(三七)藪孤山の質素

又仰に、我一族のもの肥後の藪先生を訪しに、先生仰に、今日は時習堂の詩會なりとの事ゆへ、一族の人行れしに、先生仰に、定て空腹ならん、辨當を出さるべしとの事ゆへ、皆々辨當を出せしに、皆栗飯なり、その質素思やらる、竹山先生とも入魂のよし、先生仰らる、藪先生常にいはれしは、竹山は奢侈なる人也と云れし、尤なる事也。

三月七日　孟子

逆賊大鹽の御話のみ也。

御床に、籠の大置花に、こゞめ花をタップリ生らる。

十四日　左傳

(三八)櫻宮の幽靈談

今夜も大鹽の御話にて落し噺らる、予も落首などを申上る、先生又仰に、京都にては櫻宮へ幽靈の御千度するとて、專ら評判也、當地にてはきかぬ事也、さて其幽靈といへるは、櫻宮の西岸川崎の家燒失して一軒もなし、夫ゆへ火事場の燒跡を通行する人が、水に沈んで其影が幽靈の如くみゆる也とぞ又江戸にて當地の評判は甚仰山に聞へて、御城の追手の櫓を打潰し、並に本願寺の御堂へ二三千人も楯

籠りし由風聞也とぞ。

廿二日　孟子

(三九)鯛鱧類少なき江戸

江戸にては鯛、鱧、學鰹の類至てすくなし、一萬石位の諸侯は、鯛を一枚調へんとせば、兩三日前より手當せねばならぬ也、又まな鰹は生物は至てすくなくして、味噌漬は折々あると也、夫ゆへ大阪物のやうに澤山に町人は中々喰れぬなり。

(四〇)白魚の價

白魚の價は高くせぬと賣れぬなり、伊勢の問屋へ白魚を澤山持行しものありしに、問屋の主早々仲間うちを呼よせ、大鍋にて白魚を焚、賣に來し人大にあきれしが、其翌日より白魚の價高くなりしと也、かやうにせねば白魚は賣れぬと亭主の語りし。

(四一)蜆と出羽

出羽にては蜆まれなり、出羽の人大阪へ來り、三百文を出して蜆を求めしに、澤山ありとて呆れしと也。

廿九日　左傳

(四二)大鹽父子の死

一昨日大鹽油掛町三好屋五郎兵衞方に忍び居候故、召捕人を向られしに、鐵炮をはなち、腹を切燒死せんとせしを、役人引出しぬ、平八格之助共に死果し也、今日は此事の御話のみ也。

四月二日　孟子

大鹽の御話のみ、外の雜話もなし。

四日　左傳

今夜睡魔のためにをかされ、拜聽にうむ。

廿二日　孟子

今夕古林正見同席にて、四方山の話をいたされ、物産の話より見世物の話にいたる、講釋前古林氏退出せられ、程なく御講釋あり、講釋后別に筆記すべき御話も承らず歸る。

（四三）古林正見の漫談

廿七日　孟子

先生仰に、拾芥抄はよみにくきものゝよし、水戸公三大典を御撰の時、諸方の儒者水戸公へ見ゆ、其時水戸公は拾芥抄を御出しなされ、よましめたまふに、其言の意を合點せざる者は、奥ゆかしとて御取上なされ、其書を心安くよむ者は、却つて取にたらずとて、御相手になされざりしと也。

（四四）水戸黄門と拾芥抄

又仰に、水戸公禮儀類典御撰の時、京の宮人達嘲りて云、黄門いかに博學なりとも、東えびすの分、何程の事か仕出すべきといひしに、禮儀類典を見て始めて驚動せしと也、その後いつの火事にやら、禁裏の祕書ことゞく燒亡せしよりして、禁闕の公事行事はみなゝ類典を元とするよし、誠に大切なり。

（四五）水戸黄門の禮儀類典

大鹽平八自負して三幅對を作る。中は楠公にして、左は水戸公、右は自分のよし、又これに類せしをかしき三幅對あり、前よりいひ傳へたるは、中は太閤にして、左右熊阪長範と物茂卿也、をかしな

（四六）大鹽中齋と三幅對

取合なり、其意味を問ば、みな〳〵高名の人にして六十三にて卒せし故なり。

(四七)貝原益軒と軍書談

又御話に、或三十石乘合にて、軍書讀の匂るを默して聞居られ、又軍書讀かゝる人とはしらず、乘合の人々に軍の話を夜と共に話さんと云ふに、皆々悅び聞居しに、片隅に老人の蹲り居るを見て、軍書讀老人に向ひ、あなたもかやうな話を御好にやと問に、私何も存じ候はねども、かやうな話をすき候と答られしに、御處は何國に候やと云に、筑前なりと申されしに、重て御姓名はいかゞと問に、貝原久兵なりといはれしに、軍書讀大に驚き、先よりの過言失禮を謝せしとかや。

(四八)貝原益軒と藤井懶齋の子孫

藤井懶齋の子息蘭平なるもの、大鹽みるような人にて、常々謀叛をせんならんといはれしが、早生せられぬ、其時親へ遺書を殘す、懶齋いかやうなることを記せしやと見られしに、悉く反逆の事を書たり、懶齋大に怒り、まつと早く死ばよいといはれし、然るに蘭平の子二人あり、此事を聞、父の志を繼んと武者修行に出、筑前の貝原氏を訪ふ、貝原氏湯漬など出し、扨二人に向ひ、武者修行のいはれを尋ぬるに、しか〳〵のよしにて父の志を繼よし答ふ、貝原氏呆れて、それはけしからぬこと也と異見せられしかば、二人つと座をたち門口にて、あゝ久兵衞は取にたらぬ奴也といひて去しと也、其後行方しれず。

廿九日　左傳

(四九)虎と猫

今日予難波新地へ虎を見に行しことを申せしかば、先生仰に、猫は全體虎ふのものが濫觴なり、そ

れよりいろ〳〵變色に人が作れるもの也と、木曾の山中の猫は悉く虎ふにして、勢ひ猛なり。

(五〇)呉服橋に就て

呉服橋はもとなかりしが、中頃より出來せし橋にて、廓通に行ためにかけたるもの也。

(五一)高麗橋櫓屋敷に就て

高麗橋の櫓屋敷の由來を伺しに、先生仰に、あれは往古五奉行の公事を聞し處にて、矢倉は其時の火の見櫓のよし。

今夕も睡魔にをかされ、拜聽のうち睡氣きざし、聞ども講釋の意味わからず、しかし御雜話は事の替りしことでやう〳〵爰に書することを得たり。

五月十四日　　左傳

(五二)和漢對話の優劣

長崎御奉行平賀左近將監大阪へ來られ候節語られしは、唐人同志の對話でも、多は手にて仕形をなして語ると也、夫よりは日本の和訓の便明なること遙にまされり。

(五三)三浦安貞に就て

先生仰に、三浦安貞は詩にくわしく、作も上手にて、正直なる人なり、其邊の人ども公事訴訟に及んとする時は、先安貞の宅へ行き是非を聞に、安貞夫はそなたがかう〳〵したことを云ゆへ公事になるなり、などゝ教訓せられぬ、夫故其邊は公事をことなくして安靜なりと。

廿四日　　左傳

(五四)奥田元繼と鮒伊の鰻

先生御話に、奥田元繼去所より鰻の切手一枚をもらわれ、早速鮒伊へ取にやられし處、此鰻は前日より仰なくてはなしといふゆへ、書生そのまゝ持歸りぬ、程へて元繼又かの切手を出して鮒伊へやら

んとす、書生云、前日から申さねばなしと云、先生言、不苦、それは定て絶品の鰻なるべし、何にても不苦と云、書生又持行けるに、已前の如く斷るゆへ、何にても不苦と云、鮒伊それなれば心安しとて、早々鰻を割けること四五十疋、書生呆れて其故を問ば、これは加島屋の御隱居へ行切手にして、一枚の價銀一枚なり、その切手一枚にて絶品の鰻を割に、二三疋に不過と云。

又仰に、京傳の骨董集に、蒲燒は香はやきとあり、非なり、樺色に燒を以て樺燒なるべし。

廿九日　左傳

（五五）米五升に五斗の返禮

例年六月朔日、河州若江村邊より其年の新穀を五升關東へ獻上す、そうすると關東より米五斗にして御返禮ある、此例なり。

六月二日　孟子

（五六）天王寺屋の古刀

先生御話に、頃日羽州山形の屋敷へ刀劍の名利者來り居ける處に、天王寺屋伊右衞門方に、古より藏へほり入たる刀ありしを見て、大に賞美、銘は先生御忘何々の銘なり、江戸にて某も餘多刀を見しかど、かやうな業物兩三本に過ず、もし賣拂の品ならば、早金五十兩指上んと云ふ、天伊悅び祕藏す、其後賣拂しやいなや、其程は不知と。

四日　左傳

（五七）面白き乞食

米價高値の御話の序に仰られけるに、頃日兩國橋にて一人の乞食酒をのみ、興に乘じこのやうなお

もしろきことはなしと頻に悅び、もう面桶（メンツ）も何もかも入らぬと云て川へ投げ、つゞいて自身も入水しけるとぞ、面白き奴也と仰らる。

（五八）男女席を分つ屏風

今夜舍弟野村九十郎、御上臈より拜領したる二枚屏風を先生に御目にかける、これは老中と上臈と御内談の時、男女別を分つ爲の隔の屏風のよし、其仕立高二尺に滿たして、目くらだゝみの如くして、四季の畫のかはるやうにしたり、このかはり畫の事は、人々の好にして例なきよし、先生仰に、唐にても紅帳をたれて、男女席をわかつことありと仰らる。

（五九）懷德堂書生の風儀

余歎じて思ふに、先生の溫順に引かへて、書生等の不行跡程ぞ淺まし、今夕も一人の書生講釋中熟睡し、驚き醒て行燈へ行たり、すでに書面へ油かゝらんとせしに、傍に見て居る書生等是をみて、くつ〳〵と嘲笑せり、又一人の書生歸りしなに、煙草盆を蹴ちらし、いたゞきもせず歸りたり、あまりけしからぬ事なり、先生是を叱るにものうくば、高弟に命じて教導さしてこそよかるに、これについては高弟からしてたゞ文面を覗くまでにして、其心淺はかなるが、是に付ても大鹽亂の時、學校の書生難波の谷川氏にて無禮せしとて、谷川翁の叱られしもむべなりと思はる、柴岡勘兵も、書生ほど人にすれて、不人柄なるよしいへり、人がらを直さんために寄宿にやるにあらずして、人柄をわるせん爲にやるといふもの也、もし予がかやうに過言をかきしを見怒られなば、過言を咎むることは脇にして、先自分が行作をたしなむべし。

九日　左傳

此書に筆する御話もなし。

十二日　孟子

(六〇)日本は米の國

米價高値の御話の序に、日本は結構な土地にて、どこでも米の出來ぬと云ふ土地はなし、陸奥なども米まかぬ土地は澤山あれども、あれは人少なきゆへ行屆かぬ也、蒔けば出來るなり、オロシヤなどは、千里も通ふ間に米一粒も出來ざる土地あり、清土もそれ程にはなけれども、日本のやうにはなし。

(六一)水田と高見

又仰に、亡父の話に、水田と高見とは、障子のさんと紙のごとし、水田は紙のごとくして多く、高見はさんほどにて少しとのこと也。

(六二)小人島と夜人國

余小人島や夜人國はある處に候やと伺に、ありと仰らる。

(六三)助字に就て

文章を書に、于や於の助字は、いかやうの場へつかひ候や、仰にどうも口授ではいはれぬ也。文書の工合にて、於の字や于の字をつかふなり、これも人によりて助字を多く書くせあり、又あまりかゝぬ人あり、しかれどもいづれかくべき所ではかゝねばならぬこと也、ざつといへば、短文には助字多く、詞長き文には助字すくなし、左傳に助字多く、史記に助字すくなき、八大家にても韓柳は助字多く、歐蘇は助字すくなしと仰らる。

廿九日　左傳

(六四)大鹽の亂阪本鉉卿に贈る詩

逆賊大鹽の一味の人々、今日江戸行なり、此こと御話にて其序に、此度の亂に功ありし城與力阪本源之助へ、先生詩を贈らる、拜見す。

貽阪本鉉卿

鹽賊火攻不可支、兩衙府君出大師、臨陣趦趄衆不前、阪君執銃奮且馳、賊放鉛丸汰笠頂、夷踞狙擊不避危、賊顛軍潰委兵甲、俄頃清明妖氛披、爾時失機張賊勢、賴有一箇是男兒、君元副師幕下士、砲銃名家長火枝、廼翁拔擢升東延、咨有斯父有斯子、孝不辱親忠報國、褒功且慶邦家祉、

七修類稿蜀王之亡、花蘂夫人有詩曰、二十萬軍空解甲、更無一箇是男兒

丁酉季夏　　曾縮拜稿

七月四日　孟子

(六五)疫病に芭蕉の根

此節母疫の氣味にて熱をあげ兼るゆへ、先生に芭蕉の根を所望して御もらい申せしゆへ、舍兄其御禮を申上らる、先生仰に、病人はもとより看病人も芭蕉をのめばよしと仰らる。

八月九日　左傳

(六六)茄子の大樹と大牡丹、大絲瓜

物產の御話に付、先生仰に、清土には茄子の大樹ありて、日本にては見もせぬこと也、尤清土でも南方の熱國にて、根がいたまぬ故也、又本朝尾州の去人家に、牡丹の大樹あり、葩盆の大なるがごとし、又薩州には絲瓜の大なるあり、長さ一間半もありと仰せらる。茄子のこと七修の類稿にありと仰せらる。

女の物をねたむと云ふ字、妒の字がよく候や、仰に、妒の字よし、妬は妬女と云て子を産ぬ女なり、この字は清(カラ)より古く誤り來れり。

(六七)妒字と妬字との別

十二日　孟子

先生仰に、笠置の邊の或農夫の家に、石にて造りし納屋あり、これは昔貴人の棺なりとのこと也。

(六八)笠置の石棺

足の達者と閑ある人は、春秋に旅したきと仰有、先生は御足如何と伺しに、不得手也、亡父竹山も、壯年の頃は瘦肉にて達者なりしかども、次第に肥滿して後には一里も行かねしなり、是に付ても今兵庫に居る足早の達者あり、大阪より兵庫へ一日に三度往還す、又丹波の篠山の僧、京都に鞠の友ありしを訪ひ、夫より大津へ至り寺役をなし、又京へ歸り鞠友方にて鞠を催し、暮により篠山へ歸りしと也。

(六九)旅行と健脚の人

十四日　左傳

先生仰に、叔父履軒灸はけしからぬいましめられたれど、夫は自分の好不好に引付るにしし(まゝ)、酒ぎらいの醫は酒をいましめ、酒ずきは酒をゆるす類なり、亡父竹山もけしからぬきらいにて、灸治の時は煩悶せられし、予は夫程にはなし、又小石元俊といへる京都の醫は、けしからぬ灸好にて、門人に云は、三千の灸を快く受る者に非ずば、我門下にせじと、これもあまりなり、とかくかたよらざるをよしとする。

(七〇)灸嫌ひの竹山兄弟と小石元俊

九月四日　左傳

先生仰に、此度宣下ありし家慶公は、下を御憐み至て深し、此頃の事なりけるか、御庭の泉水に夥敷金魚ゐる、夫に餌をやらんと、御近習切盤に飯を堆くなし、毎日やりけるが、ある時是を御覽遊ばし仰に、近頃聞ば世上米價高値のよし、嘸々下民難澁たるべし、金魚は死しても苦しうないと仰ある、夫より金魚へ飯やることは止みけると也、又或時御庭の亭にて御酒を召上られけるが、亭の廻りは尉の髭を植て愛玩し玉ふ、御近習醉亂して亭より落ち、尉の髭散々になる、これを御覽じて仰に、尉の髭の植所我氣に入らず、早々取拂へとの御詞にて、早速何事もなく濟たり。

又或時西の丸より登城遊ばす折、庭掃除の爺西の丸樣西の丸樣は家慶公と聞て大にあはて、逃る間なく御庭に平伏す、西の丸樣御覽じて、あれは何者なるやと、御近習云々の由申す、これにて事濟たり、此時もし御尋の御詞なくば、遠島となること也、この後此爺は世を息子に讓り、其身は浪華に來り住し、毎度此時の話をして御尋の御詞を有がたがりしと也。

十九日　左傳

床に雁の掛物畫人は曾我の蛇足であらうかと仰らる、名書なし、前に籠の置花入に、芒菊を澤山に生られたり。

（七一）德川家慶の仁慈二條

（七二）翫の字と玩の字

（七三）曾我蛇足の雁畫

先生種々の御話の中に、漢土を唐山とかくは、日本の黄檗より漢土の黄檗をさして云こと也。

和と倭の字は分あること也。昔筑前の委土の人、漢土にて國主に封ぜられしとき、委の字を日本の事と思ひ、倭土々々と書しが、後に又和の字なるをしり、和土々々と書しより、兩方を用るやうになりたり、かやうの事あちにてはまゝありと仰らる。（先生井戸茶碗も筑前委土より出しゆへ名とすと仰、これは非なり、さすが先生、茶事にはくらし）先生又仰に、惠祚人が毒箭は、ぢよろう蜘が主となると也。

此度跡部山城守（東奉行）三千石になられしは、大鹽ゆへの事にはあしじ、去年より御願にて高がへりになられ事也此餘御雜話ありしなれども、心に記憶せざること、又はさして書とめ置程のことにもあらざればもらしつ。

廿二日　孟子

京都の福井の僣上なる御話、さのみ筆記すべき程の事にてなし、講釋後漢土の書籍の御話也。

廿四日　左傳

すべて古書を引用するに、本文のまゝ出すことをせずして、自己の略文になしても不苦哉。仰に省略することはくるしからず、しかし其省略がむつかし、朱子などは夫が上手にて、程子の語を省略して引こと自在なり、とかく省略はくるしからねど、益ことはあしゝ。

講釋中より雷鳴し、雨折々車軸をなす。

（七四）漢土を唐山と書くこと

（七五）和と倭の字に就て

（七六）跡部奉行の加增に就て

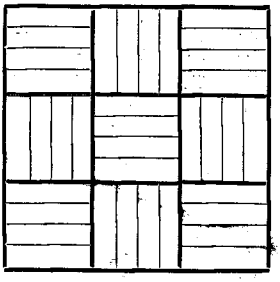
（七七）古書の引用に就て

十月十九日　　左傳

京都御上使の御話のみなり。

懷德堂講席の天井左のごとし。

（七八）懷德堂講席の天井



如此にせり、日頃より此こと尋まく思ひしゆへ、今夕伺、仰に、孟子の井田をとりしものにて、亡父の物好也。井田を倒にして、でんしやうなりとて戯れ笑ひ玉ふ。

霜月四日　　左傳

先生仰に、台德院様はいとく院と讀べきこと也、林家の訓點のあやまりより、皆々たい德とよむことと間違なり、改めためたきこと也。

（七九）臺德院の讀方

九　日　　左傳

先生仰に、毎度亡父の咄に、東都の外科某は先生外科の姓名御忘療治に才氣ありて、效驗甚すみやかも、其一

（八〇）江戸の外科名醫

二を云に、或諸侯の姫君、股の間に腫物出來ぬ、婦人のことなれば療治甚しにくし、然るに此外科招請にあひ、老女に見て腫物の有樣をとくと聞、扨姫君に逢、少し裾をまくり、其間へ鋏をいれてチョキと切りし、其すみやかなること妙也、扨其上へ膏藥をはり、三四日にして癒たり、又或所に小兒の鋏を持ち居しを、その過失あらんことを恐れ、取んとして誤て腹へ入、腸出、衆皆駭く、彼外科是を見て、是は燒切より外に療治なし、夫にてもくるしからずやと云ふに、衆皆々諾し、其法を問、醫の曰く、鏡を二三面火の如くに燒、夫にて燒切ること也、但し燒切るときは合圖をすべし、夫まではめんないをすべしとて、手拭にて貞をかくし臥さしむ、扨鏡を飯銅の中へ入れ火になりし頃、かの醫それ今と聲を懸けて、つめたき鏡をあてしが、かの兒は冷熱を不論、ひやとびつくりせしかば、腸腹中へ收りたり、又或士刀を腹へ突立、血出ること夥し、彼士何のこれしきのことゝ云て、血氣にはやる、彼外科是をみて、中々左やうに血氣にはやり玉ふことにてなし、先遺言にてもしたまへと云、彼士少し臆し、遺言をかき終り、次第に血氣衰へしかば、血の出ることも止たり。

十九日　左傳

(八一)獄門庄兵衛と紙治

獄門の庄兵衛は、もと梶木町天野屋の家人也、或とき獄門多くありし時、庄兵衛扇を獄門の口へさしてかへりしより、あだ名となれり、又大長寺の紙治は、理兵衛なるよし、夫を劇場にて治兵とせしは、堺筋の捻金名高きゆへに、それにつくりかへたる也、ねじ金は迷惑なるもの也と御話也。

(八二)書家の癖

本の字は、木と云字に一點なりしを、王義之の頃より大の字の下へ十の字を書やうにもなりたり、これは書家の癖なり。

廿四日　左傳

御雜話のみ。

廿九日　左傳

御雜話のみ

十二月四日　左傳

逆賊大鹽の御話のみ也。

十九日　左傳　今年の納講

(八三)開元天寶遺事に就て

開元天寶遺事は僞書にて、益もたゝぬこと多きなれども、高名の書なれば、物によりては引書にしてもくるしからぬこと也。

(八四)鶯の語源

鶯は諸鳥の中にて巣のうつくしき最上ゆへ、うつくしすと云ふと仰ある、うつくしすは先生の御說にてやと伺に、否左にあらず、或書にありと。

懷德堂夜話（卷之二）

天保九年戊戌

正月廿九日　左傳

御雜話のみ。

二月九日　左傳

（八五）獅子と香爐

先生仰に、獅子は烟を好むもの也、夫ゆへ、香爐などにも多く用ゆと。

（八六）大章魚の話

又仰に、章魚の大きなものは恐ろしきもの也、或所にて大章魚磯邊に上り、牛の足を纏ふ、牛も引れじと爭ひしが、終に牛を引込しと也、夫のみならず、章魚は至つて死者を好み、村舍の三昧に死者の葬ある時はどうびんへ水をためて立て、岡を歩行すること三四歳の小兒の如し、さてどうびんより水を出して火を消し、死者を食ふとぞ。

（八七）人魚の話

又仰に、人魚は魚體人身にあらず、唯其鳴聲人の如し、ゆへに鯨の字を書、世俗のやもりの如きものとは別種也、予が庭にも飼置しが、いつの間にか行方しれず、大方木へ上りしものと思はる。

按ずるに、六物新志に、人魚の圖を出して人魚の有ことを辯ぜり、先生の說いかゞ。

十四日　左傳

御雜話くさ〳〵あれども筆記すべきほどのこともなし。

三月九日　左傳

(八八)交厚き兩奉行　今の東奉行跡部山城守西奉行堀伊賀守江戸の御屋敷隣同士にして、けしからぬ御入魂なり。大阪にてまた御同役御勤、めづらしきこと也と仰らる。

(八九)橋普請の制　天下橋普請のとき、假橋を渡し、往來の人に一錢宛取こと、是は上へ拔てなきこと也、其替りに煮賣株御免にてある也、今度これを御正しなされたり、今より假橋錢とる止むや否。

(九〇)書林藤屋の話二條　先月の事なりしか、高麗橋の書林淺野彌兵衛方へ賊五六人這入り、土藏のものを奪ふ、しかるに隣家より藤屋の藏をかりて入れしに、隣家の品のみ失て藤屋の品紛失なし、疑かゝる亭主も少々疵を受ると。

又仰に、此藤屋今の主人か先の主人かしらねども　內へ嫁もらいしに、道にて狼藉者轎脇より刺す、大に評判なりしと。これは赤松九兵衛のよし、其後聞たり。

(九一)懷德堂の書生　今夕講釋の始り至て遲し、行しなに飯を喰行しに、講釋前より腹へり大に困る、いつもは飯喰はずに行しに、へりしことなし、今夕は全く時刻の遲きに身體倦しと思はる、寮の書生等喧嘩にして紀律なきものと歎ず。

廿四日　左傳

先生仰に、駒鳥は冬になると朝鮮より多く渡る、ゆへにこまの名あり。（九二）駒鳥の語源

閏四月四日　左傳

先生仰に、淺見絅齋の靖獻遺言はよきものなれども、一つの病あり、その書に難はなし、絅齋は關東を敵とし、禁裡に仕るを忠臣とし、諸侯に仕るを不忠とし、もし諸侯に仕る人あらば破門せられ、とかく京びいきよりして、この書をつくり、この書にのせし忠臣の通り京へ忠をつくせと也、江戸の儒者は京をなきものにし、京の儒者は江戸をなきものにす、にが〳〵しきこと也。（九三）京儒者の弊

又仰に、みさごずしの味は、小便にてつり也（まゝ）、みさご羽をふるへば、魚のよること手際なこと也、折には櫻宮邊へも來ると或人に聞りと。（九四）ミサゴズシの味

十九日　左傳

書籍の御話のみ。

二十九日　左傳

唐詩選は誤字多し、杜子美の一月主人笑幾回と、あれは主人にてはなし人生なり、（先生仰、一月人生の語莊子にあり、それを取りし也）人生が生人と間違ひ、生人また主人と間違ふ、李白が牀前看月光、あれも品彙に一本明月光とあり、それにてこそおもしろし、又清平調の其一其二とありて四首をのす、あれは一首づゝにてはわからぬ也、四首を合して一首の意貫通す、是は亡父の說也と仰らる。（九五）唐詩選の誤字

五月七日　孟子

先生仰に、前年美濃谷汲の開帳、太融寺にて有し時、一向不流行、百五十金の借財にて歸られず、或山師これを聞て、百五十金獻金せんことを乞、その代りに谷汲に納ある古笈摺をもらはんと云、谷汲の僧大に悅び、安きことなりとて古笈摺を與ふ、其數々萬、山師是を納めし所へ持行て、大に大金を得しと也、其道にかしこきもの也と。

（九六）山師の巧計

先月廿三日の三番にて（平野町なり）有し展觀の應擧は、性はよけれども畫勢拙し、藍江の方が筆力ありと、とうじうの說也、その中にて月夜の鴉古今の出來也。

（九七）應擧藍江の畫

今日講堂の御床に、柳に豹の掛物かゝる、畫者を尋ね申せしに知れず、藍江の云には山樂あたりならんと云、古く見へたり。

（九八）講堂の掛軸

十四日　左傳

珍石の御話の序に先生仰られけるは、我家に一つの奇石、細微にして形容しれがたし、蟲眼鏡にてみれば猿のかたちあり〳〵とみゆ、これは豐後の府內より出る產也と。

（九九）中井家藏の奇石

廿七日　孟子

豕は見た處はのさ〳〵して鈍に見ゆれども、さあ捕へるとなると、其早きこと中々手に及ばず、吾宅（先生の御宅也）に豕ありしを、吾幼年の頃村舍の夫に貰くれよと云して、夫取に來りしとき、中々捕へるこ

（一〇〇）豕の話

とに困りしと也、兵庫の五田の宅には薩州侯より拜領の豕子を産て澤山也、貰に行ば悦で呉らるゝことぞ。

六月二日　孟子

睡魔の爲に拜聽にうむ。

九　日　左傳

御雑話のみ。

十九日　左傳

先生仰に、痢病には朴の葉一枚と甘草一つまみ入て煎べし、奇驗あり。

(一〇一)痢病の妙藥

又仰に、ある僧年老て膈を患ふ、河豚の蝶(腸か)の奇藥と云ふことを聞て、我は年老たり、たとひ蝶(腸か)の毒にあたるとも、命をしからずと云て食しに治したり、これは他人に勸められぬことなれども、自ら決斷して食は食ふべし。

(一〇二)河豚の效能二條

又仰に、或人小便閉て病しに、河豚汁を食て癒たりと云、かくの如き速效あれば、毒魚に決したり。

(一〇三)周到なる公儀

又仰に、公儀と云ものは、何から何までよく吟味したるもの也、先年阿蘭陀人轉奏と關東下向の時、阿蘭陀人の屋敷の近邊出火、其時轉奏は增上寺が御立のき、阿蘭陀人をいかゞせんと伺しに、轉

奏と同所に火をさくるが例也とて、ちやつと事決したり。

廿七日　中庸開講

難波戰記の御話のみ也。

七月四日

いつもより睡魔甚しくして、人語を聞得ず。

廿九日　左傳

(一〇四)一向宗の清僧

先生仰に、近江のたしか錦色とかやら一向宗の僧清僧なり、其ゆへを問へば、祖師は優婆塞にて有しゆへ、肉食妻帶なり、それより蓮如上人より後は、僧形にて肉食妻帶也、その意祖師の法に叶はずゆへに、我は清僧也と。

(一〇五)地獄極樂の話

又仰に、地獄極樂のことは漢土にていろ〳〵あやしく作りたり、天竺の教方は隨分尤至極也、天竺は熱國ゆへ、髪もちゞみて顔色金色となる、身分よき者は、家を高く建て凉しくす、これを極樂といひ、よき事をすればかやうの處へ生るゝ、又地をほりて罪人を穴へ落す、是を地獄といふ也。

八月廿二日　中庸　今夜錯簡說也

(一〇六)前川虛舟の拓本軸

床に韓退之の羅池廟の文なり、東坡の手跡を前川虛舟石刻にしたるものなり。

(一〇七)古人は質樸

先生仰に、昔と今と人の質朴なること歎ずべし、大德寺に古法眼が過去帳あり、その中に古法眼七

十日の間毎日繪を書に通ひしに、自分の辨當にて雇賃七分なり、その間に一度はあん餅、一度は素麵を振舞しとのこと也。

(一〇八)古法眼と信長

又仰に、或時古法眼、机の下より足を投出し畫をかき居し處へ、二三人の侍通る、この中に信長もありとのこと也。

(一〇九)羽織の話

羽織といふものは近頃のもの也、前かたは甚だすくなく一町内に羽織一つ尼崎屋七郎右衞門方にありしを借り合して、御番所行などせしと也、又越の門人鈴木某、黑い絽の羽織をせしとて、出入の珍しがり、見に來りしとのこと也。

廿四日　左傳

(一一〇)岡白駒と那波師曾

さま〳〵の御話の中に、岡白駒の話に及ぶ、先生仰に、白駒の作を門人那波師曾ぬすみて、那波點の左傳といふを梓行す、白駒聞怒り、早々師曾を呼よせてこれをせむ、師曾恐れ入つて云樣は、先生には唐人の作說を我ものに御ぬすみなさる、私は門人として師の作をぬすむ、罪また輕しと、白駒赤面す。

九月二日　中庸

(一一一)痢疾の妙藥

村舍の糞壺の上を掩ひし席をからみたる繩あり、至てりん疾によしと也、或醫の僕この事を聞、りん疾に煎じ用しに、痛み益す甚しきこと二日餘り、大に弱りてもはや止んと思しに、三日目といふ朝

より、いたみ忽ちに去りしと也、奇妙なること也と仰らる。

十二日　　中庸

(一一二)文晁の山水と萩燒花入

床に文晁の山水至つて大幅にして見事也、これは文晁廿歳の時懷德堂にての席畫也、前に高麗卓、上に青磁家鴨の香爐、下に至て古物と見ゆる置花入也、紅白の菊御生なさる、これは播州白旗山より掘出せし品にて、萩燒のよし仰らる。

今夕は御話のみ也。

(一一三)碩果の女再嫁

先年先生の娘淀へ嫁せられしが、不緣になり、今度上町の醫家へ再嫁せらる、ゆへに明晩の會講、明後夜の講釋は休日也、但し十五日の詩會は有なり。

廣善按るに、いかゞのわけかはしらねども、儒家の再嫁はをかしきこと也。

廿九日　　左傳

(一一四)夜尿の妙藥

先生仰に、赤犬の肉は至て效能あるもの也、叔父中井積德の話しに、或全盛の太夫時めきけるに、とかく夜尿のくせあり、夫ゆへ客も次第に減じぬ、一日門前へ來る皮剝來り、置屋亭主に逢つて云、承れば、そこの太夫は全盛の聞え高きに、夜尿のくせ有と聞侍りし、實事ならば此藥を奉らん、私も數年御門前にて御恩を蒙りしに報ぜん爲に持參せり、則肉は赤犬なりと云、亭主大に悅び、其厚情を謝し、早速用ひし處、病忽ちに癒たり。

(一一五)虎猫の肉　又仰に、猫の肉はくわれぬもの也、たくと悉く泡となる、虎も又泡となるよし、とかく猫虎はよく似たる所ありと。

(一一六)左傳摘要　又仰に、左傳摘要は、國分にして人物の傳をみるによきもの也。

十月九日　左傳

床には先日の羅池廟の文懸る。

御病談のみ也。

十二日　中庸

御雜話のみ。

廿二日　中庸終講

(一一七)五井持軒の逸話　五井先生の話に及ぶ、五井持軒先生は篤實なる人なり、俗稱喜介一とせ朝鮮人來聘の時、面々町内にて火の用心の番をする、或夜持軒の番にあたるに、霄より一軒々々戸をたゝき、火の用心を云て觸らる、數軒言終てのち、またもとの家へ來て、又始のごとく云はれ、夜明に及ぶ、町内皆々大にこまり夕べの番は誰なりと問ふに、五井嘉助也と聞き、これより番に入れざりしと也、又或とき解船町を夜行せられしに、溜り水に船板をわたしあるをみられ、一軒々々戸をたゝき、禮をいふて行れしと也、又或とき辻君に袖を引かれて辻君なることを知らず、ゆへをとふ、辻君身の貧しきゆへいやしき勤をする

と答、先生聞れ、それは氣の毒也とて我宅へつれ歸り、飯をくわせ介抱大方ならず、翌日門弟來り、妓を見て大に忙(呆か)れ、先生に其ゆへを問ふ、先生歎じて、世にはあさましきこともあるもの也とて、夕べの始末をかたらる、門生あれはいやしきものにて、よからざるものゝよしを告、早々辻君を歸らせしと也、かやうの先生なるに、惣領は放蕩也、別に居をなし、內借多くなり、公裁に及ぶに、持軒先生も召出さるに、出入帳一冊を持出る、役人これをみるに、半紙四ツ折の小冊にして、小遣はもとより閨房のことまで書のせり、爰に於て役人大に感じられ、五井氏は學者也、相手取て公事すべきものに非ず、內濟にせよとて濟しと也、次男は又學問嫌ひて砲術をよくし、江戸へ召出され、今に五井權次郎とて家殘れり、末子は蘭洲先生とて、大に學風を起し、浪華の學問此先生よりひらけしと也、持軒先生は貝原先生と入魂にて、贈答の出翰などあまたありとなり。

霜月七日　小學

御雜話のみ。

十九日　左傳

床に朱熹の石摺の詩大掛物かゝる。

先生仰に、今の清朝天子行幸のときは、大象左右に列を立、牙と牙とを合す、いかなる者もより付くことなし、又仰に、象はよく舞を舞ふもの也と。

（一一八）行幸に象を用ふ

廿七日　小學

御雜話のみなり。

廿九日　左傳

先生御不快にて御講釋なし、玄關にて書生と雜話し歸る。

極月二日　小學

先生仰に、朝鮮は至て臆病也、罪人の首をきるに、血をみて恐るゝゆへ、一寸ときりては砂をふりかけ、一寸きりては又砂をふりかけて切こと也と。

（一一九）朝鮮人は臆病

因に云、小竹先生の話に、本邦の子、柱にて天石を打てば、外人そのはしをたゝけば泣やむ、その勇氣を甚恐るゝと也。

九　日　左傳

御雜話のみ也。

十二日　小學

御雜話のみ也。

天保十年己亥

正月廿二日　小學

御雜話のみ。

廿九日　左傳

御雜話のみ。

二月二日　小學

(一二〇)稲荷と藤の森

伏見の稲荷は、もと藤の森の末社なり、ゆへに毎年初午の日、藤の森より地をかへせ〳〵と云てくると、稲荷の神主の方よりるす〳〵といふが定り也と。

(一二一)子路の像と禹王の像

又仰に、京都の上邊にある閻魔王の像は、子路の像也、今に肩に子路と書付ある、又建仁寺町にある地藏は、禹王の像也、昔鴨河出水のとき、此像を以て水ををさめしとのこと也。

二月七日　小學

御雜話のみ也。

十二日　小學

(一二二)石川五右衛門の話

石川五右衛門の常々云しに、とかく四方を藪にて取卷たる家は這入りがたし、方角を失ふもの也。

(一二三)日本左衛門の話三條

又仰に、日本左衛門は盜賊なれども、格別のもの也、或所に泊りしに、相宿の中に出家ありしが、此出家夜中ふと目を開きしに、大の男戸をあけて外へ出る、かの僧とは〳〵見るに刀をぬきて砥石にて刃を合す、而して又内に入る、僧は寐たふりして鼾す、かの士かの僧をゆり起し、早く立のけと云、

僧そのゆへはしらねども、かの侍に伴れ出る、かの侍僧のあし遲きゆへ、脊に負走ること飛がごとくして、やうやく山中にてその僧ををろし、我こそ盜賊の日本左衞門なり、あれみたまへとて、遙の方へ指ざし敎るに、炎天を燒、僧そのゆへをとへば、我かの處へ火をかけおきたれば、かの處の人は塵也、凡かの處よりこの處まで里數いかほどあるや知りたまふかといふに、僧の答へに、三四里餘りもあらんと云ふ、日本左衞門笑つて、十四五里也といひし、すべてこの物語のことは、かの僧後に大阪のかしく寺へ移住して、人にも語り、又かの盜賊のことを委しくかきたるものもありと也。

日本左衞門ある時天神橋の上で役人に見付られ、既に捕へられんとせしに、橋上より水中へ飛び入、三日が間水中に居しと仰らる。

日本左衞門は、凡そ百年あまりにもならん、我祖父甃庵の頃、向いの鴻重へ一人の浪人來り、金をからんと乞、手代その士の威風に恐れ返答なさず、我祖父を呼に來りしゆへ、甃庵鴻重へ參られ、かの侍に逢はれていはるゝは、浪人は天下の御法度也、ゆへにどうもならぬとことはられしに、かの士そのまゝかへりしと也、これ日本左衞門なりと也。

廿七日　小學

先生の御話に、頃日の事とかや、戎橋生洲大與の僕、もとは藝州の侍なりしが、放蕩にして國許を駈落し、大與の僕となる、ある日國許の母より手紙來りしをみるに、何某といふ侍に父の討れたるゆ

（一二四）大與の僕仇を討損ふ

へ、敵をうてとの事也、僕心に納めしが、一日大與へ鰻を喰に來りしものをみるに、父を討たる侍なるにぞ、これはと驚きしが、其居處を跡より附添行しに、阪町邊也、ゆへに翌日大與の主に僕のいへるは、昨日國元の近付參り候間訪ひしとて、鰻をもち右の侍の處へ行しに、右の侍出て舊好の挨拶をなす、僕はどうも言出しにくけれども、終に父の敵たることを名のりかくるに、侍曰く、成程夫は尤也、其ことに付我も國元にて御疑かゝり、しばらく牢舍もせし程のこと也、それは我にあらずと云に、僕もせん方なく、口惜きあまり天滿の與力に近付のありけるにぞ、夫へ參り右の分を述べ、さて侍は明日北邊へ遊行仕ることに候間、御糺たまわれと賴む、與力も天下の罪人にてはなし、我かゝりにあらずとは思ひながら諾しける、果して翌日かの侍北方へ行しを、一寸と招きて我宅へ呼よせ、段々たづねしに、始の程は陳せしかど、終に白狀せしが、ひまを考へてそのまゝ門を出、藏屋敷へ賴て其身は國へ歸りしと也、つまらぬはかの僕也。

三月九日　　左傳

（一二五）丑の時參の話

先生御話に、丑の時參りの頭へ火をいたゞき、又は胸に鏡を掛る、すべて賊をおどす爲也とぞ。

又仰に、丑の時參りに付ておもしろき話あり、ある女丑の時參りして、毎夜々々男の胸のあたりと覺しき處へ、釘を打て、先の男のやうすを聞に、何のかはりしこともなし、その筈也、男の商賣は糠屋にてありしとて大笑なさる。

廿九日　　左傳

(一二六)秀吉の曾呂利畫賛

兵庫の北風は、神功皇后の時よりの名家なり、この家に太閤の曾呂利の畫賛あり。

太閤がそろり〳〵と書たそろり

いと面白きものなりとぞ。

四月廿九日　　左傳

床に朱子の御作の石摺かゝる

(一二七)鱶の鮮

先生仰に、大阪の僧(たしか)善正寺兵庫の沖に舟かゝりせしに、或夜僕頻に叫ぶ、夜明に及んで僕僧に云らく、夜前船の舳へふかのかゝりて睡り居たる、其聲雷の如し、ゆへに叫びしと、僧これを聞いて左也しかと驚きしが、其後大阪にてふかを見せものにせしはこのふか也とぞ、大さ三間あまり也と。

(一二八)人魚の話

又仰に、人魚といふは鯨也、木の空へのぼりて泣聲人のごとし、ゆへに人魚と云、この鯨を或處に馬盥に入れて養しが、三年たちしかど水にごらず、奇なこと也。

(一二九)龍と龜

むかし有て今たへてなきは龍なり、むかしすくなくて今多くあるは龜也、すでに京都にては當地より龜すくなし、子ども珍らしく翫ぶ。

五月九日　　左傳

御雜話のみ也。

廿四日　左傳

御雜話のみ也。

八月廿二日　小學

(一三〇)蟇の話

蟇は物をすうことは妙なもの也、或處にて盆中の干菓子自然におどる、ふしぎにおもひしに、庭に蟇のゐたりしが、皆其口へ吸し也、又或處へ去人行しに、壁の際にて鼬の踊るをみて主人に告たれば、それは壁越に蟇が鼬を引しもの也と云て、鼬を追つてやられし、すべて蟇は壁越に鼬を十分ひくと鼬死す、そうすると壁の下の際よりのさ〳〵と蟇のきて土をほり、かの鼬を埋め、少し穴に口をあけ置、その處へ小便をなし去、四五日過ぎて又來ると、小便にて鼬悉くくさりて蟲となる、その蟲をくふ、うゐんなやつ也と仰らる。

九月二日　小學

御雜話のみ也。

十月廿二日　小學

御雜話のみ也。

懷德堂夜話　終